

□海外文献紹介□

炎症性腸疾患の家族発生

Familial occurrence of inflammatory bowel disease: *Orholm M, et al* (N Engl J Med 324: 84-88, 1991)

著者らは、デンマークのコペンハーゲン郡における炎症性腸疾患 (IBD) の家族発生について研究調査した。

1979 年以前に IBD と診断された 662 人の患者と面談し、第 I 度および第 II 度近親者に IBD の罹患者がいるかどうかを質問した。患者のうち 96% (潰瘍性大腸炎 504 人、Crohn 病 133 人) から確実な回答を得た。

その結果、IBD の 637 人の患者の第 I 度近親者 (親子同胞) では、一般人口群と比べて年齢・性補正後約

10 倍のリスクがあることがわかった。上記 2 つの疾患の、他のほうに罹患するリスクも若干増大していた。すなわち、潰瘍性大腸炎患者の第 I 度近親者での罹患リスクは、潰瘍性大腸炎で 9.5 倍、Crohn 病 1.5 倍であり、他方 Crohn 病患者の第 I 度近親者では、Crohn 病 10.3 倍、潰瘍性大腸炎 4.4 倍を示した。潰瘍性大腸炎患者の第 I 度近親者での同疾患罹患リスクは、近親者が属する世代による差や、患者および近親者の性による差を見出さなかった。第 I 度近親者の罹患リスクは、患者が 50 歳未満に潰瘍性大腸炎との診断を受けた場合にやや高い傾向を示したが、近親者の現在の年齢との関連は見出せなかった。第 II 度近親者では、患者と同じ疾患の罹患リスク

は高かったが、他の疾患については増加を認めなかった。

結論として、IBD の家族での罹患リスクが 10 倍高いことから、IBD の遺伝性が強く示唆された。

〔訳者コメント〕 IBD の家族発生は、罹患率の高い欧米ではまれではない。したがって、近親者での罹患リスクが容易に計算される。本邦でも IBD が増えているとはいえ、なにごと罹患率は欧米に比べて低く、家族発生はまれである。私自身の経験でも、現在までのところ近親者で同疾患を罹患した例は経験していない。本邦ではこのような研究は難しい。著者らの研究は大変参考になった。

(愛知県がんセンター消化器内科

小林 世美 抄)